2016年小諸市協働連携事業調査研究活動報告書

――任意団体アジアの「わ」

はじめに

本文は2016年夏休み期間で実施した明治学院大学社会連携課と小諸市役所との連携事業調査に参加した任意団体アジアの「わ」から提出した報告書である。以下の文は両部分で構成されている。まず、本文の執筆者は参加者三人うちの二人であって、第一部分は参加者呉東哲からの感想及び小諸市へのメッセージを書いてある。第二部分は参加者インソウトウからの活動を参加した感想及び小諸市への助言を示してある。

第一部分（呉東哲執筆）

私は留学生として、日本の郷村部へ行く経験がなく、この度に今回の活動に参加できて、実に心から嬉しいと感じている。出発する前は日本の郷土生活に好奇心が高まり、人と人のつながりと日常生活を体験することを目標としていた。

小諸市で滞在する三日間は都市とまったく違うことを感じた。このような自然と近い生活、そして自然、人間に敬意、配慮を持つ生活はなかなか母国の場合と似ていて、むしろ過去の生活に近いである。この三日間私たちは小諸市周辺を詳しく見物した。懐古園、千曲川、そしてさまざまな美術館。懐古園の中にある藤村記念館は今回一番感じ深いところであった。私はまだ日本へ来ていないごろ、小説『破戒』の訳本によって、島崎藤村という名前を知りはじめた。そのとき、これから明治学院に入り、彼と校友となるのも想像をつかなかった。彼の作品を詳しく読まなかったが、文字の中から出てくる「自然主義」的な印象が強く感じている。彼が生活、治学した小諸の地はかなり彼に大きな影響をあげただろう。いまでも小諸の地は田園生活への興味を引いている。

記念館の中で、藤村手書きの二文字「簡」と「素」が私の注意を払った。「簡単素朴」とはまさしく小諸での生活写照であった。世界中で環境問題を話題とする現在「簡」と「素」はどのような意味を持っているのかをこれからの生活の中で考えて行きたい。

小諸市の文化的資源でも、自然的資源でも豊かであると考えている。今回の活動によって、日本に来た外国人観光客の立場を考えてみた。時代の変わるによって、ツアー旅行ではなく、より自由な旅行を求める観光客が現れてくる。都市や賑やかな観光地より、むしろ小諸のような静かで時間を過ごせて、そして、人情が溢れている日本を感じることの方を目指している観光が多いだろう。例としては、今回見物したいくつの美術館や公園は既に外国語の案内が置いてある。ぜひこのような便利の提供を続けると考えている。しかし、書類や案内などの翻訳は意味の偏りがたまに生じるかもしれない。これを避けることを助言のひとつとなる。

第二部分（インソウトウ執筆）

今度の小諸市市役所との活動は非常に貴重な経験だと感じている。小諸市についた後、宿泊した民宿青雲館の方が私たちを親切に招待した、ごちそうの温泉も人生の素晴らしい思い出を作った。言葉が出ないほどの美しい景色も小諸市を離れても忘れられない。

この中、日本の小学生と接触した経験が日本の初等教育についての初経験だった。「元気」「好奇心旺盛」「かわいい」あの子達を思い出すたびに、彼達を褒めたくなる。中国の留学生だと聞いて、中国は危険な国だと言った、私は微笑みながらある子に聞いた：「どうして危険だと思うの？」テレビのニュースで見たとか、両親から聞いたとかという答えが多いです。マスコミや情報によって、中国についてあまり詳しくない両親の「常識的」な言葉から生じたかもしれない。あの子達の外人に対する警戒を消すために、自分紹介からずっと笑っていた、地理から中国を紹介し、私たち子供のごろ遊んだゲームも日本の子供に教えてあげた。ちなみに、ゲームの途中、ある子が倒れて転んだ。私はすぐにそばに行って「大丈夫？けがをした？」と声をかけたが、返事なく泣いているだけだ。この時、小学校先生があの子を体育館の隅のところに引き連れた、ゲーム再開になった。しかし、さっき泣いている子は涙を止んで、もうすぐふたたびゲームの中に参加した。やはり、注目を得る子供は泣いたら関心をもらえると思う。少しの教育方法を心得た上で、楽しい一日を過ごした。

今回の活動の中で非常に感じたには小諸市においての少子化や人口減少及び公共事業利用の低下である。小売り店といろんな店が閉店になり、若者は都市に集中する傾向は明らかである。利用率の低下によって、バス線路が停運になり、車と人の数が少ないという点からずいぶん住民人口が減少するのを感じている。しかし、自然観光地としてはこれから友達にすすめられる。

終わりに

前文で言及した現在、世界中の若者がどんどん自然価値の意識を戻りつつ、都市から農村部へ移住する「ローカルへ」の風潮が見えてくる。過去の生活と考えは過去に留まるではなく、未来に向けて、過去的生活こそ未来的生活だと考えている。最後に、これから小諸市の地域活性化と自然、社会環境は豊かであることを心から願っておる。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（2000文字）